ブータンの学校教育史に関する基礎的研究
―伝統と近代の共存を巡る葛藤を中心に―

平　山　雄　大
早稲田大学大学院教育学研究科　博士課程
（現　早稲田大学教育総合研究所　助手）

諸　　言

本研究報告は、ブータンにおける一般に開かれた近代学校教育の草創期である 1950 年代に着目し、(1) 1950 年代当時のブータンの為政者が近代学校教育に対してどのような考えを持ち、それをどのように整備したのか、また、(2) 国民は近代学校教育をどのように受容したのかという疑問に回答を与えることを目的としている。

1950 年代に行われていた学校教育に関しては、ブータン教育史研究の未開性から先行研究でもほとんど取り上げられたことがなく、その詳細は未だ明らかにされていない。筆者の研究から、当時はネパール人移住者が設立した学校及びブータン人が設立した学校が国内に混在していたこと、教授言語や授業内容は統一されておらず各学校によって相違が見られたこと等が明らかになっている。ネパール人移住者の学校は地域住民からの強い要望のもとで学校建設がなされ、小規模の私立学校として開校した。教授言語にはヒンディー語やネパール語が採用され、多くの教員をインドやネパールから招聘していたことが認められる。一方ブータン人の学校は各地の地方行政官が音頭を取り、比較的規模の大きい公立学校として設置された例が多く見られ、基本的にはヒンディー語を教授言語とし自国民の教員が教授にあたっていた。

本研究報告の対象はブータン人が設立した学校に限定する。上記の公立学校がどのように整備され、どのように受容されたのかを明らかにすることは、1961 年に開始される第 1 次 5 ヵ年計画以降の学校教育拡充政策、さらにはブータンの社会経済開発を理解するうえで極めて重要であると考えられる。

結果・考察

第 3 代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュク（在位 1952 ～ 1972 年）は、即位した翌年の 1953 年に一院制の国会を開設しているが、規定された構成規則の前文に第 3 代国王の教育に対する考えが明確に示されている [1)]。

神の慈悲とわれらの従前の規則によって執られた手段により、われわれはわが国の独立と民族的保全を維持してきた。しかし、独立という珠玉を保持しつつも、われわれは、教育の欠如故に、未だ後進的である。われわれは、多くを改良することができないでいる。

世界の他の諸国は、教育における急速な発展の故に、迅速な進歩を遂げている。現在の状況の下で、われわれも、これら発展を遂げた諸国と同じ点にまで、自らを引き上げなければならない。

ここから、第 3 代国王が近代国家の基盤を整えるための基礎として、国民への教育の普及を重視していたことが理解できる。ローズによると、当初第 3 代国王は近代学校教育の拡充に他の社会経済開発よりも高い優先順位を与えていた。「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」というのが国家運営の大原則であったという [2)]。国家の運営方法と近代学校教育の普及の相関に関しては、1958 年にブータン初の首相となるジグメ・パルデン・ドルジ（以下ジグメ・ドルジ）が、1956 年 5 月にニューヨークタイムズの記者に語った意見も示唆に富んでいる [3)]。

ブータン人は、国家建設の欲望と外国人の援助が支配をもたらすという恐れの間で苦しんでいる。ミスター・ジグメは、「ブータン人は無学な人間なので、外国人の召使い以外には何者にもなれない」と言う。「ブータンで教育制度を確立させ、それから外国人を招聘するというのがその解決策である」と彼は主張し、ブータンが外国人を受け入れられるようになるまで 7 年はかかるであろうと見積もっている。それだけの時間を取って、ブータンは賭けにでなければならないのである。

両者に共通するのは、国の独立維持に対する危機感と、近代学校教育の普及をもってして近代国家の礎を築き、社会経済開発を成し遂げようという姿勢である。ブータンの歴史はこれ以前もこれ以降も国家の存続をかけた苦難の連続であったと言えるが、1950 年代の地域情勢、とりわけ中国によるチベット侵攻をふまえ、当時は独立を維持するという意識が為政者の間で通常以上に高まっていたと考えられる。

確かに外国人への依存は国の独立を危険に晒す恐れが

あったため、上記の国家運営の原則及びジグメ・ドルジの意見通り、近代化を先延ばしにするという代償のもとで、少なくとも1959年までは外国人への過度の依存は避けられていたようである。教育現場においても、確認されうる限り、ブータン人の学校では1950年代を通してインド及びその他の国から教員を招聘するようなことはしていない。

このような中で近代学校教育の拡充が計られ、各地で公立学校が作られていく。1958年に開催された第11回国会において、ダガナ県の地方行政官が当時まだ学校が存在していなかった4つの県に新たに公立学校を作るべきであると進言していること、複数人の回想から読み取れる地方行政官タシの振る舞い等から、国王や首相に限らず、地方の為政者も近代学校教育の拡充に対する意識は高かったことが窺える。ただし、近代学校教育の導入は国会において審議されることはなく、統一された教育制度やカリキュラムが存在しないまま進められていった。

1958年9月、インド初代首相ジャワハルラール・ネルー（以下ネルー）がブータンを訪問し、両国が今後採るべき政策について第3代国王と協議した[4]。協議の内容は防衛の強化と友好の再確認であり、ネルーは第3代国王に対し、孤立主義政策を修正しインドの経済援助を受け入れるよう強く促した。当然、そこには対中国を見据えたインドの安全保障政策があり、ネルーはインドとブータンを結ぶ自動車道路の建設を強く提言している。

大国間の衝突への関与を可能な限り忌避したいこと、さらにおそらくは近代学校教育の普及が始まったばかりで近代化するには早すぎるとの懸念から第3代国王は即答を避けているが、その年の第11回国会及び翌年の第12回国会において道路建設及び陸軍本部の設置が決議され、インドの全面的な後押しのもとで開発が実行に移されることになる。

「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」という国家運営の原則が大きく転換していく過程で、今まではっきりとは確認されていなかった近代学校教育の導入が正式に決議された。1959年10月に開催された第13回国会の議事録・決議録の中に、「教育はあらゆる国の発展に不可欠であるため、わが王国の学校に近代教育を取り入れることが決められた。そのようにして、社会経済的自立を促進し、外国人労働力への依存を軽減する」[5]との一文が見られる。

それでは、上からの近代学校教育の普及に対してブータンの国民はどのような反応を見せ、学校教育をどのように受容していったのだろうか。結論から述べると、1950年代を通して親は子どもを学校に行かせることに対して消極的であり、その存在を歓迎しなかった。何とかして子どもを学校に行かせないように画策したという例が多く見受けられる。各地の教員らは村に赴き親を説得し、地方行政官は親を呼び出し説得し、ときに半強制的に子どもを集め学校へと通わせた。この当時、国民は学校教育を受容したというよりは、受容するよう説き伏せられたと言ったほうが合っている。

例えばシェムガン県では、生徒を集めるために4人の有識者がタスクグループを結成し、各人が県内の各村を巡回し子どもを学校に行かせるよう訴えた。またトンサ県においても、就学を促すために教員が各村を訪ね歩いた旨が記録されている。その際、一家に2人以上の男児がいる場合はそのうちの1人を学校に送るよう説得して回ったという[6]。

ペマガツェル県の学校は1959年に開校したが、丑年（1949年）、寅年（1950年）、卯年（1951年）生まれの子どもには就学が義務づけられたという[7]。モンガル県のジグメ・ザンポの祖父は、就学者リストから孫の名前を削除してもらうよう知己の役人に頼み了承を得たが、地方行政官からの布令が届き、半強制的に就学させられてしまった。呼び出された親たちは、「自分の子どもは耳が聞こえない／口が聞けない」と虚偽の嘆願をし、子どもが連れて行かれることを拒んだ[8]。教員や地方行政官にとって、近代教育についてまったく知識のない親たちにその有意性を理解させることは困難を極めた。トンサ中学校に入学したドルジ・ツェリンは、親たちの多くは学校の意味するところが分からず、子どもが徴兵されたのだと誤解していたと回想している[9]。

ハ県では、ジグメ・ドルジの手によって、1914年に開校したブータン初の近代学校が初等教育を提供する男女共学の学校に生まれ変わっている。約50人の第1期生は1951年に入学し1956年に卒業しているが、この卒業生が、一般に開かれた学校としては国内初の初等教育修了生であると認識されている。

ただし、当初は住民の理解が得られず生徒が集まらなかった。第1期生を入学させる際にジグメ・ドルジが生徒集めに使った方法は、「祭りを開催するので全員必ず集まるように」と各村に通達を出し、集まった村人をもてなしている最中に子どもを捕まえて名前を聞き出し、就学者リストに登録していくというものであった[10]。多くの親は子どもを隠すのに成功したが、両親と離れて祭りを観賞していた子どもは捕まり、第1期生となったようである。ただし第1期生として入学したダワ・デムによると、就

学者リストへの登録が完了した後も子どもたちの親は「家の手伝いをする者がいなくなってしまう」等と申し立て子どもを学校へ行かすことを拒み、実際に就学した者はそのうちのごく一部であったという[11]。また、ジグメ・ドルジはハ県内にとどまらず、他県においても生徒集めを行っていたことがマンジョの著書から読み取れる[12]。

要約・今後の課題

以上、1950年代のブータンにおける近代学校教育の整備と受容の様相を概観した。冒頭で提示した設問への回答を要約すると以下の通りとなる。

（1）為政者は近代学校教育に対してどのような考えを持ち、それをどのように整備したのか

第3代国王やジグメ・ドルジは、社会経済開発を行うにあたって近代学校教育の普及を最重要視していた。「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」という原則のもとで地方行政官が先頭に立ちその拡充が計られるが、近隣諸国の情勢のもと早い段階で政策の転換を余儀なくされる。近代学校教育の導入が正式に決議されたのは1959年10月であり、統一された近代学校教育制度やカリキュラムの誕生は1960年代に入るまで待たなければならない。

（2）国民は学校教育をどのように受容したのか

国民は近代学校教育の重要性を理解しておらず、子どもの親は教員や地方行政官によってそれを受容するよう説き伏せられた。1950年代を通して親は子どもを学校に行かせることに対して消極的であったため、モンガル県やハ県の事例に代表されるように、半強制的に子どもを登録し就学させるようなことも行われた。

本研究報告を執筆するうえで可能な限り1950年代のブータンの学校教育を巡る動きを詳察しようと試みたが、文献研究にのみ依拠しているため深化の余地を有している。当時の学校に通っていた元生徒等の証言を直接収集・分析し研究に反映させることを今後の課題としたい。

謝　辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団第50回（平成24年度）学術研究奨励金を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

文　献

1）Kuensel: “The Constitution of the National Assembly － Rules and Regulations for Assembly Meetings －”, 1971.11.14.
2）Rose, Leo E.: The Politics of Bhutan, pp.131-132, Cornell University Press, 1977.
3）The New York Times: “Change is Coming, Bhutanese Says － But the Wheel-Less State in the Himalayas Fears Rise of Modernization －”, 1956.5.10.
4）The New York Times: “Nehru Opens Talks with Bhutan’s Ruler after 5-Day Trek by Pony, Mule and Yak”, 1958.9.22.
5）National Assembly Secretariat, Royal Government of Bhutan (RGoB)：Volume 1 － Proceedings and Resolutions of the National Assembly from 1st to 30th Sessions －, p.27, RGoB, 1999.
6）Centre for Educational Research and Development (CERD)，Paro College of Education (PCE)，The Royal University of Bhutan (RUB)：Sherig Saga － Profiles of Our Seats of Learning －, p.575, pp.663-664, CERD, 2008.
7）Zangley Dukpa: “Reflections of an Educator” (in CERD, Department of Education (DoE)，National Institute of Education (NIE)：The Call － Stories of Yesteryears －)，p.28, CERD, 2002.
8）Jigme Zangpo (2002) “The Journey” (in CERD, DoE, NIE: The Call － Stories of Yesteryears －)，p.9, CERD, 2002.
9）Dorji Tshering (2002) “Down Memory Lane” (in CERD, DoE, NIE: The Call － Stories of Yesteryears －)，p.67, CERD, 2002.
10）Gagay Lhamu (2002) “My School Days” (in CERD, DoE, NIE: The Call － Stories of Yesteryears －)，p.23, CERD, 2002.
11）Stewart, Natalie H. et al.: Class of ’56, p.95, Voluntary Artists’ Studio (VAST)，2008.
12）Mangeot, Sylvain: The Adventures of a Manchurian － The Story of Lobsang Thondup －, p.223, Collins, 1974.